

〔第29回大会公開講演〕

ヤスパース技術論の批判的検証とその可能性

福 井 一 光

I

「ヤスパース技術論の批判的検証とその可能性」というタイトルでしばらくお話しさせて頂くわけですが、では何故私がこのテーマを話題にしようと思ったのかといいますと、その動機は、やはり何ととっても、大震災に私自身がめぐり合わせてしまったという歴史的経験に基づくものです。昨年3月11日の出来事に関して、何に重きをおいて受け止めるのか、人それぞれだと思いますが、私にとってはあらためて「技術」というものを考えざるを得ない契機となりました。よく「科学・技術」と一口にいいますが、後段科学にも触れようとは思いますが、今日はあくまでも最後まで技術にこだわりたいと思います。原発問題や汚染問題などを目の当たりにしますと、ヤスパースがいうように、「人間は、自分で自分のものとして技術的に産出した第二の自然の中で窒息している」⁽¹⁾状況が^{しゅったい}出来しているといわざるを得ないわけで、この状況を作りだしたのも、明らかに技術であれば、この状況を克服していくのも、直接的には技術であろうと思うからです。

ただ、技術を考えるとといっても、無論私は、残念ながら技術者ではないので、私には哲学的に考える術^{すべ}しかありません。また、哲学徒ではあっても、これまた残念ながら独創的な哲学者ではないので、どなたかの技術論を手掛かりにしながら、私なりに技術というものを考えざるを得ないわけであります。

そう考えます時、何ととっても、私にとっては、日本で先駆的に技術論を展開した一人であった恩師・高山岩男先生の技術論⁽²⁾や、これも高山先生から教えて頂いたデッサウエルの技術論⁽³⁾、そして当のヤスパースの技術論が、私なりに技術を考える場合のよい手掛かりを与えてくれるもののように思います。逸早

く本格的な技術哲学を展開したデッサウエルについては、ヤスパースも参照していますよね。

なお、ちょっと見まわしてみますと、ヘーゲルも、次のような一種の技術論を考えました。彼によれば、「自然 (Natur)」は、「精神 (Geist)」との弁証関係にあつて、「有機的システムを欠いている (unorganisch)」単なるレス、つまり物として捉えられるべきものではなく、人間がこれと対決することの中でのみ本来の姿を現わしてくるのであり、その本質が理解されるようになる、自然は、人間が自己を「外化 (entäßern)」し、自然を「内化 (erinnern)」する運動の中で自らの可能性を露見させてくるのである、こういった捉え方をするわけです⁽⁴⁾。また、ヘーゲルがこう考えた論理を逆手に取るかのように、ハイデッガーは、「自^{おのずか}ら - 然^{みずか}か - 成ること (das von-sich-her-Aufgehen)」という意味を自然概念に認めて、フューシスの概念を拠り所としながら、自^{みずか}らが「自^{みずか}らに成りつつ (eignend)」自^{みずか}らを現わす、物が「物に成りつつ (dingend)」物を現わす、世界が「世界に成りつつ (weltend)」世界を現わす、その「出て - 来 - たらす (her-vor-bringen)」一つの仕方を技術に見て、世界が「世開する (welten)」真相を解釈学的に解き明かそうとするわけです。所謂ハイデッガーのポイエシス論です⁽⁵⁾。この視座は、私たちが如何なる根拠から技術を構築すべきなのかということを考える時に、根本的な問題に触れ合っている指摘とっていいように思います。

しかし、今日、このような性質の問題にまで議論を拡張することは、この限られた時間内ではとても困難ですし、また仮にハイデッガーの議論が如何に根源的であるとしても、實際上堅固に作り上げられた現代の技術的システムをご破算にして、そこより本来の^{しょう}性^{しょう}を呼び出す、あるいは存在の方から促される「あるべき技術」を再構築する議論などは、この現実社会に対しては全く歯が立たない話ですので、私は、もう少し手前のところで、むしろ技術の直接的問題性に話を止めようと思います。その方が、技術問題が喫緊の課題となっている今日においては、見かけの深淵なハイデッガー風技術論をするよりも、むしろ実質的な益があるようにさえ思いますし。そうであっても、技術問題は、哲学にどういう方向づけが出来るのか、容易ならざる問題、現代の難問中の難問

という感じがしています。

Ⅱ

さて、ここは「日本ヤスパース協会」ですから、当然ヤスパースの技術論を取り上げてみたいと思うのですが、まずヤスパースが技術というものをどのように定義しているかということを確認するところから議論を始めてみようと思います。プラトン以来、概念をはっきりと確認しながら議論を進めていくことが、いつの場合も正しい哲学的議論の筋道と思うからです。

そこで、まずヤスパースのいう技術論の重要な点を総括的に述べれば、以下のように整理することが出来るでしょう。ヤスパースが技術というものに言及している著作は、主に『現代の精神的状況』や『原爆と人間の未来』や『歴史の起源と目標』などですが、一番まとまった形のものは『歴史の起源と目標』ですので、ここに紹介する引用文は、全てそこからのものです。

- ①「技術とは、人間生活の形成を目的としての、科学的人間による自然支配の営みをいう⁽⁶⁾」。
- ②「技術とはある目的の達成のために、いくつかの手段を挿入することによって発生する⁽⁷⁾」。
- ③「技術は更に、あらかじめ建てられた目標の達成のために手段を作り出すだけではない。技術が作り出すものは、その発明がなされた際には、それをもって更に、その先何が造り出されうるかを誰も知らぬような形成物なのである⁽⁸⁾」。
- ④「近代技術的世界の発生には、自然科学、発明精神、労働組織の三者が、緊密に関連している。これら三要素に共通なのは合理性である。三者のどれもが単独で近代技術を実現できなかつた⁽⁹⁾」。
- ⑤「技術は環境界における人間の日常生活を徹底的に変革し、労働方式や社会をして新たな軌道をとらざるをえなくした。すなわち大量生産方式がとられ、社会全体の生活を技術的に完成された機械へと変え、全地球あげて単一の工場と化した⁽¹⁰⁾」。
- ⑥「技術自身は何らの目的も含まぬから、技術はあらゆる善悪の彼岸ないし以

前にある。技術は禍福いずれをも主人として仕えることができる。技術は両者に対しそれ自体中立なのである。だからこそ技術には指導を要するわけである。—中略—「しかし」技術の指導は技術自身から見いだすことはできず、それは自覚的なエトスから求められねばならぬのである。人間自身が指導に立ち帰らねばならぬ。人間は自己の欲求を明確にし、検討し、もろもろの欲求間の序列を判然とさせねばならない」⁽¹¹⁾。

- ⑦「技術は単に手段であって、それ自体善でも悪でもない。重大なのは、人間が技術から何を作り出すのか、何の目的で人間は技術を用いるのか、人間が技術をいかなる制約下に置くのか、である。技術に支配されるのではなく、技術を支配する人間とは、一体どのような人間であるのか、技術を支配して人間は結局いかなる存在者としてみずからの実を示すのか、これが問題なのである。—中略— 技術が人間の意向から解き放たれて、怪物たちの手で狂暴性を発揮する、——あるいは人間を含めて全地球が巨大な工場の材料にすぎなくなり、全体はひとつの蟻塚のようになって、いっさいを自己の一部に取り入れてしまい、かろうじて生産と消費の循環として、無内容な出来事の空廻りが残る、などという事態はありうべきことだろうか？ 悟性はこれを可能であるとするかもしれない。しかし —中略— 思想のみが技術の支配者となるのではない。人間が生きる根本的に新たな諸条件のもとで、人間はいかなる形で自己の可能性を与えられているか、この問題は現在ならびに来るべき数世紀のうちに、世界史的規模で決着をつけられるであろう」⁽¹²⁾。

そして、ヤスパースは、この技術論のくだりをこういつて締めくくります。「〈哲学すること〉とはこういった現実⁽¹³⁾に眼を注がねばならない」。以上であります。

因みに、最後のくだりのこの世界史的規模での決着とは、人類の没落という決着か、再生という決着か、相矛盾する決着という可能性があるのですが、勿論極めてはっきりしていることは、私達人類は、再生という方向で技術を打ち立てなければならないことでしょう。

III

そこで、一つずつ確認しながら、議論を進めてみますと、①「技術とは、人間生活の形成を目的としての、科学的人間による自然支配の営みをいう」。つまり、技術は、一方において人間が生活目的を実現するために自然状態にはなかったものを創造するということに産出されたものであるわけですし、他方これによって明らかに神によって創造された第一の自然は変容され、自然状態にはなかったものが産み出されていくということであるのだと思います。言い換えれば、技術は、その発端からして、人間の生活目的に基づく人間の自然環境の繫縛からの解放、自然状態からの離脱を本質とするものなのです。これが通常「文明化」といわれる現象です。そして、この文明化の進展は、当然のことながら人間による自然改造・自然支配の進捗と裏腹の関係ということなのです。

ただ、こういう議論をし始めると、哲学などに関心をもつ人の中には、直ちに、だから自然支配の思想がいけない、文明化の道に既に悪の芽が潜んでいるといったようなアンチ技術論を展開したり、あるいはそのような自然の捉え方によって、本来の自然の姿が見えなくなってしまうといったような、ある意味では最も深刻で具体的な歴史や社会の難問をスキップして、隠された自然の発見というような一種宗教性をおびた議論を展開したがるものですが、事はそう簡単なことではないわけです。何故なら、私達は、ジャン＝ジャック・ルソー風に最早自然状態に還れるはずもなく、いざそうなれば、ヒポクラテスの実証医学もなかった、パスツールのウィルス培養やワクチン開発もなかった、それが幸せかどうかとも疑問もいいところで、一方において日常生活においては文明の恩恵を享受しながら、他方において思想のみ自然回帰を主張したとしても、それは、あまりにもご都合主義の言説といわざるを得ないからです。

例えば、ヤスパーズに『デカルトと哲学』というエッセンシャルな名著がありますが、この中においてデカルトの思想を一つの強力な徹底性、一面しか見ない思想、しかもこのような思想が歴史に影響を及ぼす大きな実例といい、全体的内容、全き人間、充実された世界は、彼の対象でもなく、彼の根源でもなく、彼の抽象的な思惟は、一本のキリのような存在であると形容しています。⁽¹⁴⁾

確かに、デカルトの思惟の明晰判明性についての形容は、それはそれで全くその通りで的確であるわけですが、しかしデカルトの機械論的自然観や記号的認識の方法を哲学的に批判することは、ある意味では容易いことですが、デカルト的対象理解の方法は、現実世界においては、今日、例えば客観化・実証化・効率化ということからして、自然のみならず人間的な領域にも及び、あらゆる領域に拡張されていっているわけであって、なお重大な影響をもち続けているということは、紛れもない事実でしょう。つまり、デカルトの思想は、近代という時代を押し開いたキリであったばかりでなく、近代史の中に鋭く突きささり続けているキリであるという点なのでありまして、問題は、一度刺さったこの鋭利で堅固なキリは、今日の文明の中枢にまで達し、簡単には引き抜けないということなのです。また、無理して引き抜けば、今日の文明は、内部から解体する可能性さえある。簡単な話、仮に客観化・実証化・効率化の陥る欠陥を哲学的に批判するのは当然としても、しかしこれがいけないからとして、これらを社会から奪ってごらんない、この社会は、たちまち完全に機能不全に陥ることになる。実は、ここが一番難しい問題なのです。ですから、私達は、技術に対しても、そう簡単にこれを断罪し、思想世界においてのみ自然の意義を強調するのは、そこに関心を寄せる哲学者個人の関心は満足されるのですが、現実社会の人々への十分な説得性を欠いた議論といわざるを得ないわけです。

確かに、近代に支配的であった自然観に対するオルタナティブな自然観を持ち出し、その比較を語ることは、無意味なことだとは思いません。例えば、東洋的な自然観を合わせ鏡にすることによって、その中には気がつかない、近代に支配的であった西洋的な自然観の矛盾や欠陥を際立たせることも、それなりの価値はあるのだと思います。その議論は、広く自然の尊重に資する議論を啓蒙・啓発するという点からしても、それなりの意味のあることだとは思いますが。そうした啓蒙的・啓発的議論を提供することによって、自然に関心を向ける人々も出てくるだろう、長い目で見れば、それは、やがては社会や、ひいては歴史にも何らかの影響を与えることにもなるだろう、哲学という学問は、即物的な技術などを直接的に話題にするより、「無用の用」というか、もう少し

しアガデミックな言葉を使えば「原因の原因」を探るというか、もっと引いたところで議論をすればいいのだ、また哲学という学問は、そもそもそれしかできない、そういう考え方を取る人もいるかも知れません。あるいは、哲学という学問も、今では文献学のような個別科学の一分野なので、ヤスパースはこういった、ハイデッガーはこういったというような「哲学学 (Philosophiologie)」という分野で成り立つ議論をすれば、それでいいのだ、そういった考え方を取る人もいるかも知れません。勿論、哲学学に専心しなければならない修学の時期というものもあるわけで、きっちと本を読み、きっちと事を理解する、術語をきっちと消化する、こういった仕事を決して軽んじてはならないわけですが、しかし私も大分年を取りまして、そう悠長に構えているわけにはいかなくなりまして、まして大震災のような出来事をめぐる問題の深刻さにぶつかる時、私たちは、思想を思想として説明するだけでいいということでは済まされないと思うのです。今日の問題の深刻さは、自然が死に、機械が残る、そしてそれだけではない、敢えていえば、地球工場化された機械もまた瓦解してしまうかもしれないというリアルな構図の中で、これを前提として語る必要がある。何故なら、グローバル化した世界史的世界が成立している今日の状況においては、この東洋的自然観が指し示す自然という事態が仮に何処かの位相に成り立ったとしても、その状態を独り世界史的世界の埒外におくことを許さないからです。やや皮肉を込めていえば、瓦礫がはびこる世界の中に如何に美しい箱庭をこしらえても、その箱庭は、晚かれ早かれ瓦礫の侵食に呑み込まれていってしまうことでしょう。それが世界史的世界の本質ということだと思います。ビル・ゲイツだけではありません、ヒマラヤの隠遁行者も埒外ではないわけです、誰も彼もその枠組みからエスケープし、その枠組みの外に飛び出ることは出来ないわけだし、ヘーゲルの言葉「ここがロードスだ、ここで跳べ」ではないですが、この枠組みの中で成り立つ議論でなければ、リアルな意味をもち得ないからです。

その意味において、デッサウエルの技術哲学は、簡単に技術批判をすまして、安易に自然回帰をねらう態度に立つものではなく、むしろ技術を神の世界創造の人間による継承、続行、即ち「更なる創造 (Weiterschöpfung)」と捉え、技術

の働きにある種の宗教的意義さえも認めて、最後まで技術の可能性を肯定的に探ろうとするのですね。デッサウエルの関心と思索は、通常の哲学を専攻する人士とは方向を異にしているのかも知れませんが、彼の技術哲学の方が、よく聞く技術による自然破壊論よりも、遥かに歴史や社会に貢献する議論のように私には思われるわけです。デッサウエルは、「技術は神との接触であり。技術を通して神の創造的精神は人類の朝なる現代に⁽¹⁵⁾入来する」とさえいっております。そして、その『技術の哲学』の序論においては、この書を執筆する意図が次のように謳われています。「本書は、多様な読者圏に向けられてゐる。即ち、哲学者には、彼等が技術にその注意を向けるために、技術家には、彼等が自己反省、即ち哲学に到達するために、また文化人には、彼等が技術の本質、その秩序、その意義、その価値、その理想主体を認識し、彼等が単に外的に所有して⁽¹⁶⁾ゐるものを遂に内的に把握するために」と。

どこまで、私が技術について言えるかどうか分かりませんし、今日の話も、輝かしい未来を提示するなどということにはとてもいきません、いや、それ以前に皆さんにそもそも納得して頂けるかどうか分かりません。しかし、このような時代であればこそ、あまり議論されない技術というものを真正面から考えてみる必要があることだけは、はっきりといえるように思うわけです。また、時代状況を問わず、何か若い方にも真剣に技術哲学というものを考えてみる価値があるのだということも理解して頂きたいとも思うわけです。

二番目に進みましょう。②「技術とはある目的の達成のために、いくつかの手段を挿入することによって発生する」。例えば、重い荷物を運ぼうとする目的のためには、素材の認識と素材の活用が必要だし、更にはそれらの組み合わせによって作られた台座が必要だし、梃子も、車輪も、車軸も必要だし、というように。その意味で、技術が成り立つためには、先ずは自然とその法則を認識することが前提としてある。それはそうでしょう、飛行機は、自然状態にはなかったものですが、自然現象・自然法則に反したものであるなら、空を飛ぶことは出来ないわけですから。しかし、現象と法則を認識するに止まるだけでは技術は生まれない。技術が生まれるためには、自然とその法則の中から何かを「発明的に直観 (Erfindungsschau)」し、更には発明的に発見する努力、そし

てこれに何かを付与する加工と、重い荷物を運ぼうとする目的に向けての全契機の統一的結合が必要なのです。ヤスパースがいうように、「技術は、悟性の働きに立脚する。すなわち、もろもろの可能性の予感や推測と結びついた考量に基づいている⁽¹⁷⁾」ということなのです。

ただ、その時注意すべきことは、特に技術の場合、その悟性の働きが一人によって代表されるものではなく、必ず不特定多数の人々によって担われる働きというところにあり、人々の働きは、この時、この時代だけではない、必ず時間の経過の中で現実化されるというところにあります。デッサウエルもこうしています。「デトロイトにおけるヘンリ・フォードの自動車工場の一つの組み立てベルトから、十分の一ミリメートルまで正確になってある何千もの個々部分から成立してある完製自動車が、一日に五百台出てくるとすれば、それに先行したすべてのものは何だろうか？ 思惟と実現との過程の充満、個々の発明、方法の発明の集団、及び研究の大集団である⁽¹⁸⁾」と。ですから、技術は、時間的過程の中で、必ず工夫・改良の対象になり、この過程は今後も継続していくわけです。

ただ、この過程は、継続していくわけではありますが、継続だからといって、常に「連続的 (stetig)」にばかり進行するものではありません。「非連続的 (unstetig)」に飛躍する場合があります。あるいは、全く違う方向から突然、時として偶然、進入してくるという場合があります。これは、デッサウエルもいつていることですが、空を飛びたいという「人間の飛行は鳥の飛行を遥かに引離し、歴史的に動く翼が放棄されたとき初めて成功した⁽¹⁹⁾」ものでした。つまり、ライト兄弟の飛行機は、ギリシャ時代以来続いた鳥の翼の模倣から飛躍し、解放されたところに生まれたということです。スリーMがポスト・イットを開発したのも、強力な接着剤を開発する過程の中に突然・偶然に進入した出来事でした。ある技術の開発過程において、突然乃至偶然にどこからかリングが降ってくることもあるわけです。イノベーションとは、常にそうしたものかも知れません。ヤスパースは、『現代の精神的状況』において、こういっています。「技術的機構がすでに、そのものとしては、決して完結することができないのである⁽²⁰⁾」と。それが、技術が発展していく所以でもありましょう。

その意味で、ヤスパースの経済機構を先駆的に視野に入れた④の指摘、「近代技術的世界の発生には、自然科学、発明精神、労働組織の三者が、緊密に関連している。これら三要素に共通なのは合理性である。三者のどれもが単独で近代技術を実現できなかった」という見解は、卓見なのであって、その見解の射定は、彼等よりもより一層根源的であると言えましょう。特に近代技術は、正にこれらの連繋の中の産物なのです。こうして、このような技術の歩みの一つの帰結として、ヤスパースが⑤を強調するに至ることは、「必然の結果」ではありませんが、まことに「当然の結果」のことということが出来ましょう。

⑤「技術は環境界における人間の日常生活を徹底的に変革し、労働方式や社会をして新たな軌道をとらざるをえなくした。すなわち大量生産方式がとられ、社会全体の生活を技術的に完成された機械へと変え、全地球あげて単一の工場と化した」。これが、近代技術の辿りつく一つの、あくまでも一つのですが、帰結なのであります。この事実は、余程深刻に受け止めておかなければなりません。

IV

しかしながら、これが技術の辿りつく一つの帰結だからといって、それで済ませていいというわけにはいかないわけで、従ってこれで技術論の結論とするわけにはとてもまいらないわけです。何故なら、私達の生活も、私達の存在も、単一の工場の機械部品の消耗対象として終わらせていいわけではないわけですし、またこの工場そのものも、優良生産と優良商品の安定した工場として私達に恩恵ばかりをもたらしてくれるわけでもどうもなさそうです。いや、それ以前に、この工場自体が何時まで適切に機能するかどうかとも判らないからです。多くの人々が安全だとして、建設し、稼働させ、クリーンエネルギーとしてその恩恵を享受してきた原発の破綻は、その工場の危うさを如実に見せつけた出来事であったといえましょう。

やや、話はわき道にそれますが、ヤスパースは、『原子爆弾と人間の未来』を書いた1958年段階において、核問題について、特に次の二点について深い憂慮を表明しています。一つは、早晚起こってくる核拡散問題です。先ず、米ソ

に続こうとする英仏の核兵器保有化、次に外国の技術者を誘致することによって、それ以外の諸国に核兵器開発が広がる危険性、また近年北朝鮮やイランやパキスタンで現実化されたわけですが、小国の賭けに出る絶望的冒険主義による核兵器保有、そして今日ではテロリストといってもいいでしょう、自分を破壊することも、他人を破壊することも平気なニヒリストによる核兵器保有。「そうすると、世界はなおまったく別の形で火山の上で生きることになる⁽²¹⁾」と彼は予言しています。もう一つは、核エネルギーとその管理の問題です。原子エネルギーは、石油・石炭の地下資源の数十年乃至数百年の枯渇に代わる新しい可能性をもたらすが、しかし住民の安全保障の必要が生じる技術であるという点が残る。従って、原子エネルギーの管理を徹底する必要があるが、如何なる民間会社も不可能であり、それを為し得るものは、国家のみだ。ただ、彼は、こう言っています。「ひとは、今日ではまだもろもろの可能性をあまねく見とおすことができない — 中略 — われわれの時代から、将来において、人類の終末が人間の諸行為によって生じる危険はもはや決して消失しないであろう⁽²²⁾」。今日、正に彼の予言が現象しているといっているでしょう。

このように、兵器にしろ、エネルギー使用にしろ、核問題を抱えて、しかも全地球あげて運命共同体的な単一の工場という景観を呈し、しかもこれが瓦解するということになるのであれば、それは、文明の死、世界史の死を意味することになりましょう。ですから、繰り返していうように、この先が本当の難問なのです。

そこで、⑥と⑦のヤスパースの見解に話が及ぶわけですが、このヤスパースの見解は、人類の未来を考える時、極めて重大な示唆を与えてくれるものでありましょう。ただ、その視点を活かすためにも、私から見ますと、彼の論理構成と事実認識について、もう少し注意深く見まわしておかなければならないことがあるように思います。

まず、⑥の記述ですが、「技術の指導は技術自身から見いだすことはできず、それは自覚的なエトスから求められねばならぬのである。人間自身が指導に立ち帰らねばならぬ。人間は自己の欲求を明確にし、検討し、もろもろの欲求間の序列を判然とさせねばならない」。この見解は、まことにその通りだと思い

ますし、今後の技術問題を考える時の欠くべからざる視点とっていいでしょう。しかし、前段の「技術自身は何らの目的も含まぬから、技術はあらゆる善悪の彼岸ないし以前にある。技術は禍福いずれをも主人として仕えることができる。技術は両者に対しそれ自体中立なのである」、これは、本当なのでしょうか。

また、⑦の記述ですが、「重大なのは、人間が技術から何を作り出すのか、何の目的で人間は技術を用いるのか、人間が技術をいかなる制約下に置くのか、である。技術に支配されるのではなく、技術を支配する人間とは、一体どのような人間であるのか、技術を支配して人間は結局いかなる存在者としてみずからの実を示すのか、これが問題なのである。――中略―― 技術が人間の意向から解き放たれて、怪物たちの手で狂暴性を発揮する、――あるいは人間を含めて全地球が巨大な工場の材料にすぎなくなり、全体はひとつの蟻塚のようになって、いっさいを自己の一部に取り入れてしまい、かろうじて生産と消費の循環として、無内容な出来事の空廻りが残る、などという事態はありうべきことだろうか？ 悟性はこれを可能であるとするかもしれない。しかし――中略―― 思想のみが技術の支配者となるのではない。人間が生きる根本的に新たな諸条件のもとで、人間はいかなる形で自己の可能性を与えられているか、この問題は現在ならびに来るべき数世紀のうちに、世界史的規模で決着をつけられるであろう」。このヤスパースの発言は、極めて適切で、真剣で、重要であります。この文脈を冷静に詳らかにすることに、私は、技術というものを決して否定するのではなく、技術というものを新しい人間の「投企 (Entwurf)」に結びつける裂け目があるように思うわけです。ですから、この見解に最後まで執着したいと思います。が、しかし、その前段の「技術は単に手段であって、それ自体善でも悪でもない」、このヤスパースの認識は、正しいのでしょうか。

ちょっと振り返ってみましょう。①②の文章における技術の本質規定は、こうでした。「技術とは、人間生活の形成を目的としての、科学的人間による自然支配の営みをいう」。「技術とはある目的の達成のために、いくつかの手段を挿入することによって発生する」。つまり、技術を目的に関わる事柄だとしておきながら、⑥⑦では、技術は、何らの目的も含まないという、また単に手

段であるのだから、善でも悪でもない、つまり価値性から免れているという。これは、説明上の矛盾のようにも聞こえてくるわけです。

いや、その読み方は正しくはないのだ、慎重にこう読まなくてはならないという言い方も出来るかもしれません。つまり、ヤスパーズのいう目的実現の主語は、人間にあり、技術そのものにあるわけではないのだと。だから、技術が目的をもつわけではなく、技術を使用する人間が目的をもつものなのであり、技術そのものはあくまでも手段に止まり、この意味で技術は、目的にとってはニュートラルで、それを人間が自分の生活目的の実現のために活用するに過ぎない。しかるが故に、咎があるとすれば、それは使用者にあるのであって、技術は、善悪の彼岸にある、こう解釈すべきだという読解も成り立つようにも思えます。

しかし、仮にそう文章を解釈しても、疑問が湧いてくるわけです。確かに、常識的に考えれば、人間がナイフを食事に使うか、殺人に使うかによって技術は善とも悪ともなり、技術自身は、価値に対しては中立であるという言い方は出来るでしょう。この言い方は、常識としては解るようにも思えます。しかし、この見解は、まだ素朴な技術論の範囲に止まっているように私には思われます。16世紀、メディチ家のカトリヌによってフランスに持ち込まれたナイフとフォークによって、その後の西洋人の食卓のマナーそのものを、ということは人人の振舞い方や意識を変えたとは、よくいわれることです。グーテンベルクの活版印刷術も、技術が大がかりに人間の意識を変えた最も象徴的な例でありました。印刷技術の発明がなければ、「sola-fide (信仰のみ)」、「sola-gratia (恩寵のみ)」と並ぶ、あのルターの基本信条「sola-scriptura (文献のみ [聖書のみ])」は、時代に対する絶大な影響力ももたなかったでしょう。⁽²³⁾ 魅力的な文化史家エーゴン・フリーデルが「グーテンベルク人種がゴシック人種に勝ち誇る」⁽²⁴⁾、そういって、中世を脱する近代人の意識の形成に不可欠であった印刷技術の果たした役割を強調した所以です。

今日から見ると素朴な技術にしてそうなのですから、この技術が更に発展して、単なる「道具的技術」のレベルに止まらず、「機械的技術」のレベルになってきますと、放っておけば、あくまでも放っておけばですが、その「自動性

(automatism)」にのっとり、人間の主体性を無化する方向にさえ働き始めるのであります。例えば、スコップは、人間が使わなければ、動きはしません。しかし、技術的機構は、人間の主体などにはお構いなしにオートマティカリーに作用することになるわけで、この進展の過程の中で、技術を作った主体としての人間と人間によって作られた客体としての技術が転倒して、今度は技術への人間の奉仕に逆転する可能性を孕んでいるといわなければならないわけです。そのことは、ヤスパースも『現代の精神的状況』の議論以来、十分指摘していたはずで、そうであれば、技術は、無色透明なニュートラルな産物などというものではなく、べったりと目的や価値を刷り込まれている、そうでなければ技術が自動性をもって動き始めるなどという表現さえ成り立ちはしはしないではありませんか。いや、それどころか、技術が当の人間自身の意識や行動や目的を方向づける主体たり得るということさえあるのであれば、技術が価値性や目的性からまぬがれているなどとてもいえないわけです。スティーブ・ジョブズは、2001年、「i pod の開発は、音楽の聴き方だけでなく、音楽業界全体を変えてしまった」と豪語しました。

そう考えると、技術があらゆる善悪の彼岸ないし以前にある、単に手段であって、それ自体善でも悪でもない、議論を簡単に処理することが出来るものではなく、その経緯についてもう少し思いをめぐらせてみるべきことがあるように思うわけです。ですから、先ほども同様の趣旨のことをいいました。技術は、それ自体、正に価値や目的をもつが故に、市場経済の最大の関心事となるのだと。ハーバーマスは、マルクーゼのテーゼ「技術の利用ではなく、技術そのものがすでに（自然と人間にたいする）支配であり、方法的、科学的、功利的、打算的な支配である⁽²⁵⁾」を重く捉えましたが、私から見ても、この見解は決して過剰とは思われません。ひとまず、そういうことをいっておきたいと思います。

V

また、もう一つ、技術論をする場合、考えておかななくてはならないのは、科学との関係です。ヤスパースは、近代科学の本質について重要な指摘を行って

いますので、まずそれを紹介しておきましょう。「あらゆる科学は方法的であり、範疇において思惟し、それぞれの特殊的認識において必然的である⁽²⁶⁾」。私は、この短い言葉の中に近代科学の本質特徴がよく表れていると思います。つまり、科学とは、方法的認識であり、範疇的思惟であり、しかるが故に方法的に呼び出され、範疇的に整えられた限りの、その意味で一定の特殊的認識において必然といい得る真理だということです。ただし、ここは、やや慎重にいわなければならないのであって、次のことを付言しておかなければなりません。即ち、この特殊的認識は、同一の方法的認識と同一の範疇的思惟を採用する限りには、誰が行っても、然在る、あるいは然成ると強制的確実性をもって認識者に迫る普遍妥当性をもった真理ということなのです。ヤスパーズは、こういっています。「理解がどの人の悟性からも必然的に経験されうるから、科学的認識は普及され、その際意味の点であくまで同一である。一致ということが普遍妥当性のしるしである⁽²⁷⁾」。

フランシス・ベーコンとルネ・デカルトは、正にこの方法的認識及び範疇的思惟の原型を確立したという意味で、模範的な近代科学の理論的基礎づけ者でありました。即ち、ベーコンは、実験的観察を具体的方法とした帰納的推理による合理的実証を科学的行為の中心に据えましたし、デカルトは、数理計算を具体的方法とした演繹的推理による合理的予見を科学的行為の中心に据えました。近代科学が力をもった根拠は、この実験性と数理性、帰納性と演繹性、実証性と予見性の統合にあると見て間違いないでしょう。ということは、これをそのまま裏返せば、近代科学が獲得する真理とは、一方実験的方法を通じて呼び出された限りの真理でありますし、他方数学的範疇に基づいて整理された限りの真理ということなのであります。その意味で、実験的方法であれ、数学的範疇であれ、これらを採用する限りにおいて、共に近代科学の認識と思惟は、常に一つの操作なのですね。つまり、科学的態度の本質は、こうした認識と思惟の操作性にあるといわなければなりません。

フィリップ・J・デービスとルーベン・ヘルシュという二人のアメリカの数学者が『デカルトの夢』という面白い本を書いているのですが、彼等は、数学的な知的活動の過程で、現実は「強いられた数学的現実」となり、現実から

「意味の喪失」と「意味の根絶」が起こるといっていますが、至言といってい
 いでしょう。⁽²⁸⁾つまり、最もスタティックな認識と思われる数学的認識であった
 としても、数学的・文字の中に積極的に世界を配列しなおしたということなので
 す。ヤスパーズが「問いへの答えは、ギリシャ的思惟においては熟考と納得に
 より行われ、近代的思惟においては実験と進歩した観察により行われる。研究
 とは、古代の思惟では全く単なる熟考を意味するにすぎず、近代的思惟におい
 てようやく一つの行為を意味するようになる⁽²⁹⁾」といっていますが、私もまこと
 にその通りだと思います。こう考えてみますと、実験的観察であれ、数学的思
 惟であれ、共に対象に働きかける積極的な行為なのです。逆にいえば、積極的
 な行為の内容が、近代科学においては実験的観察であり、数学的思惟であるとい
 うことなのです。

ただ、数学を基調にした範疇的思惟を、如何に操作といっても、それは「思
 弁的操作 (spekulative Operation)」とはいいい得ても、通常の意味で、これをち
 ょっと「技術的操作 (technische Operation)」とはいいいにくい。しかるに、実
 験的観察、これこそ勝義において技術性を欠いては初めから成り立ち得ないも
 のなのであって、この実験的観察こそ、勝れて技術的操作といっていいいもので
 あります。従って、実験的観察こそ、近代科学というものが純粋な認識行為、
 即ち「観照的 (kontemplativ) な認識」ではなく、技術をもって自然に働きかけ、
 観照しているだけでは解らない自然の真理を呼びだすのだという、本質的に
 「操作的 (operativ) な認識」にあるということを真に証しするものといってい
 いでしょう。

科学史的に解釈すればですが、近代科学が興隆した18世紀、カントが人間の
 認識に「構成的原理 (ein konstitutives Prinzip)」を認めざるを得ないと考えた
 背景には、カント自身は語らずとも、こうした認識の操作性の意義をどのよう
 に考えたらいいいのかという、極めて近代的な哲学の自覚があったものと推測し
 ても、あながち筋違いなこととは思われません。そう考えてみますと、技術は、
 近代科学の認識行為に初めから組み込まれているといわざるを得ないわけです。
 私は、そこに近代科学の知の本質的な問題があるのではないかと思うのであつ
 て、私が何を言いたいのかといえ、簡単に言って、分裂的に理解される「科

学と技術」でもなく、並列的に理解される「科学・技術」でもなく、近代の認識が科学と技術が内面的に統合された「技術的科学」を本質とするという点なのですね。

その意味で、ハイデッガーが次のようにいっているのは、私にはよく理解出来るところです。「『近代技術 (die mode Technik)』は精密自然科学に支えられることができた時にこそ、初めて歩き出した。なるほど『史学的 (historisch)』に数えれば、それはあくまでも正当である。しかし『歴史的 (geschichtlich)』に思惟すれば、それは真実にふれるものではない。—中略— そのために、近代技術があたかも応用自然科学であるかのような、欺瞞の見せかけが成り立つのである。この見せかけは、『近世科学 (die neuzeitliche Wissenschaft)』の本性の由来や更には近代技術の本性までが、十分に問い確かめられない限りは、いつまでもまかり通ることであろう⁽³⁰⁾」。つまり、技術は、一方においては、科学的行為、あるいは科学的理性を産み出した前史、プレヒストリーとして重大な役割を果たしてきたものであり、技術がなければ科学的行為、あるいは科学的理性というもの、まして近代の自然科学などというものも成立しはしなかったわけです。これと同時に、技術は、また他方において、単純に科学を産み出すプレヒストリーという一方通行の方向だけで作用しているのではなく、実は科学そのものの内実をディアレクティッシュに、弁証法的に形成しているものなのであります。ですから、彼のいうように、技術は、科学の単なる応用などという程度のものではないのです。つまり、ハイデッガー風にいえば、技術も科学も「立て—組 (Ge-stell)」の中にある出来事として捉えられなければならないということでしょう。

そうである以上、私達は、科学的認識についても、歴史性を免れたニュートラルな真理探究というわけにはいきません。先ほど、技術というものは、どうしようもなくア・プリオリに価値や目的に関わる人間の営為であるといいました。そのことは、どう見ても疑い得ないわけですが、その意味で技術を媒介して科学的認識が成り立つのだとすれば、認識活動といえども、殊に近代においては、価値性・目的性と無縁にはなり切れないわけですね。近代科学は、デカルト以来、価値性や目的性を排除することによって客観的な科学的認識を構築

してきたと一般にはいわれるわけですが、アリストテレス以来の価値論・目的論を払拭してスタートし、発展したと思ってきた近代科学もまた、最終的には価値論・目的論を排除、無視し得ないわけですよ。

更に、今日、なお厄介な問題は、先ほども申しましたように、この価値や目的は、正に価値や目的をもつが故に、市場経済の最大の関心事となり、そうだとすれば、技術的科学が、明らかに市場経済という、しかもグローバル化した経済機構によって収奪されてしまうということになる。つまり、対象となる事柄を研究する個人やインスティテュートの動機や関心、方法や活動、目的や利害を制度的に、また資金的に条件づけているのは、明らかに経済的諸要因だからです。これは、研究が経済的諸要因によって強いられているということでもあるわけですね。簡単な話、科学的分野の研究や開発をしようにも、そこに何がしかの資本が投下されなければ行えないわけで、研究は今日プロジェクトとしてあるわけですから、その意味でこうした研究や開発を支援し振興する市場経済がどのような方向を志向するかということによって、科学が産出する成果の内容も大きく変わってくるということなのです。ですから、歴史に制約されない純粋科学等というものは、これまでもあったためしも、またこれからもあるはずもなく、科学そのものが既に、マルクーゼがいう「一種の歴史的投企 (ein spezifischer geschichtlicher Entwurf)」、乃至ハーバーマスがいう「一つの歴史的・社会的プロジェクト (ein geschichtlich-gesellschaftliches Projekt)」であるという点です。従って、それ自体、元々ニュートラルな真理探求の活動というわけではないので、まして近代科学が価値や功利を生み出す技術と結びついて成り立つ「技術的理性 (die technische Vernunft)」であるという事実を見る時、科学にさえ明瞭に歴史性やイデオロギー性がつきまとうことを見逃してはならないということなのですね。ですから、「19世紀以来、技術の科学化という —中略— 発展傾向が、いよいよ顕著なものとなってきた。—中略— 大規模な工業研究にともなって、科学と技術と体制への応用とが一体化された。—中略— 技術的進歩の方向性、機能、速度を決定するのは社会的な利害関係である」⁽³¹⁾ というハーバーマスの認識は、正しいといわなければなりません。

そう考えてみますと、私達がよく聞く言説は、相当誤っているといわざるを

得ない。科学者は、こういいたがります。科学は、純粋な知的好奇心から行われるもので、価値や目的に対してニュートラルだ、善悪はこの科学的成果を技術に転用する時に発生するものだ。だから、善悪の責任を問うのであれば、技術者にあってほしいと。また、技術者は、こういいたがります。技術は、それ自体として善でも悪でもない、善悪はこの技術的成果を人間が活用する時に発生するものだ。だから、善悪の責任を問うのであれば、使用者にあってほしいと。しかし、私から見ますと、技術は勿論、科学でさえ、歴史の審判の責任を免れはしないということなのです。

VI

このように考えてきまして、私は、初めに紹介したヤスパースの最後の引用文に帰ってきます。私達は、世界史的規模で決着を図らなくてはならないとしたら、無論再生の方向でその決着を図らなくてはならないとしたら、人類の「持続可能性 (sustainability)」の希望は、この技術的科学乃至科学的技術をどちらの方向に向かって「投企 (Entwurf)」するか、ということにかかっているといつてよいように思うのです。それこそが、私が先ほどヤスパースの言葉を紹介する過程で、技術というものを新しい人間の投企に結びつける裂け目と申したモメントなのであります。

無論、この投企は、一人だけの投企でもなければ、一回だけの投企でもありません。それこそ、科学・技術史を担う無名の技術者や高名な科学者が、それぞれの制作や研究のレベルで行う投企であります。また、この技術者や科学者の投企は、当該の技術や科学の性質に依存して行われる他ないものではありませんが、しかしその投企を促す本当の根源は、ヤスパースがいうように、人間が自己の欲求を明確にし、検討し、もろもろの欲求間の序列を判然とさせることの中にあります。何故なら、三木清もいうように、技術も科学も相互依存的乃至弁証法的に働く構想力の産物なのであって、殊に技術は、「人間の知的性質に基くことは言ふまでもないが、それがまた人間のパトスの一定の性質、そのデモーニッシュな性質に基⁽³²⁾いゐる」からです。従つて、問題は、人間が結局いかなる存在者として「みずからの実を示す (sich bewähren)」のか、その実を

実存的に問うことの中にあります。仮に悟性が可能であるといっても、生産と消費の循環として、無内容な出来事の空廻りの中で技術を投企するのではなく、もっと具体的に言い換えれば、曰く経済効率性の実現、曰く国際競争力の確保、曰く経済成長の持続、曰く電力生産量の維持等々といったものを常に一義的に先行させて考える思想のみが技術の支配者となるのではなく、人間が生きる根本的に新たな諸条件のもとで、自覚的なエトスから技術を投企することが求められなければならないということなのだと思います。思想というものは、往々標語化し、実体とはかけ離れて独り歩きすることによって幻影化し、その内実を余程注意深く検証してみなければ、様々な嘘が巢食っている可能性をたつぷりと含んでいるからであります。日本の原発54基中たった1基しか稼働していないにも拘わらず、原発による電力生産量を維持しなくては社会がもたない、集団自殺するに等しいなどという言説の不思議さ等は、その最たるものといっていいいでしょう。ですから、問題は、むしろ科学・技術それ自体に善悪の価値がべったりと刷り込まれていることを十分認めた上で、科学・技術の試みる歴史的投企を如何なる方向に向けて試みるのかというところにあるといわなければなりません。

結論的に述べれば、仮説的な営為として成り立つ科学・技術の向かうべき方向を、その合理的な明証力・制作力は維持しながら、これまでのような、特に近代の発端以来綿々として続いてきた「進化 (Evolution)」という発展系列にではなく、発展の系列の先に待っていたものが世界史の死乃至世界史の限界状況であることが合理的に想定される以上、「飛躍 (Aufschwung)」という転回系列に振り向けるところに、哲学の果すべき真にリアルな役割があるように思われるわけです。人類の目的は、幸せにあるのであって、発展にあるわけではないはずであり、発展が必ず幸せをもたらすとは、近代の最大の錯覚だったということでしょう。従って、科学・技術を放棄したり、社会や歴史の問題を迂回して、単に自然を強調するのではなく、全ての科学・技術の能力を維持したままで、その歴史的投企をどのように振り向けていくか、有り体にいって、どのような歴史的投企が人間の実のある幸せと結びつくのか、科学・技術との関係において、その実をどこまで提示し得るのか、哲学に希望を開くことの出来る

現実的な可能性があるとしたなら、そこにこそあるように思えるわけです。ですから、私の言いたがっていることは、トマス・クーン風のパラダイム転換と
 いったような大がかりなことでは差しあたってはありませ⁽³³⁾ん。科学・技術の歴史的投企の問題に哲学の議論を如何に集中させることが出来るかということなのであります。もっとヤスパースに則した言い方でいえば、彼が人間の生き方の基本信条とした、一方にある所与的必然性の重さと、他方にある実存的自由の可能性を切り結ぼうとする、それが科学者であれ、技術者であれ、その人がその人である証^{あかし}ともいふべき「可能的実存 (mögliche Existenz)」という態度を、この科学・技術論の文脈の中に如何に組み込むことが出来るか、それこそがこの問題の要諦なのだと思います。

そして、その場合、哲学者にとって特に重要と思えるのは、その実をどこまで政治のイニシアティブに結びつけることが出来るのかどうか、それがこの技術論の文脈における哲学の果たすべき最終的な役割なのであらうと考えます。何といっても、政治は、その時代が抱えもつ全ての営為を善くも悪くも一定の方向へと方向づける可能性をもつものだからです。例えば、エネルギー政策をどのように設定するかによって、その時代の技術の結集の仕方も大きく変わっていくからです。同じ「テクネー」といっても、個人的な活動という傾向の強い「芸術」とは違って、先ほどもいいましたように、「技術」は、「集団の英知の蓄積」というところが強いわけですから、技術にこそ、その民族、あるいは国民がもっている、あるいはまたその時代がもっている「構想力 (Einbildungskraft)」の総体が最も典型的に現われてくるといっているでしょう。この意味で、芸術こそ本来のテクネーと捉え、『詩的なるもの (das Dichterische)』は『真なるもの (das Wahre)』を — 中略 — 『最も純粹に出で輝くもの (das am reinsten Hervorscheinende)』の光のなかに持ち来⁽³⁴⁾す」と、まあ凝った言い方ではありますが、詩的芸術活動をモデルにとって近代技術を救う淡い期待を繋ごうとするハイデゲリアンでは、私は明らかにありません。日本では、宗教や芸術は語っても、政治などはアカデミックな哲学者が語るものではないというのが通り相場ですが、ヤスパースは、極めて真剣でありました。彼は、こうしています。「政治的結論をもたぬ哲学は存在しない — 中略 — 政治的思惟をと

もなわぬ、いかなる偉大な哲学も存在しません⁽³⁵⁾」と。

断っておきますが、私は、冒頭、安易に宗教をもち出すことの危うさを口に
し、今また性急に芸術に^{よすが}縁を求めるひ弱さを口にしているわけですが、勿論
宗教や芸術に意味がないなどといっているわけでは全くありません。それはそ
れで、大変な価値がある世界だと思います。例えば、禅仏教風宗教論も、ハイ
デッガー風芸術論も、立派な宗教論、芸術論です。ただ、文明が破綻する危機
の時代にあって、よし世界が滅ぶなら、せめて宗教や芸術に救いを求めようと
ニヒルに構えるなら別ですが、なお人類に可能性が残っているのだとすれば、
これらがこの状況を乗り越える本当に有効な手立てたり得るのか、むしろそれ
らは、この時代に胚胎する深刻な問題性と哲学がなお果たすべき努力を無限に
脇に逸し去らせてしまうことにはならないのかといっているに過ぎません。

そう考えてみる時、今日お話ししたようなヤスパースの思索の枠組みを前提
におきながら、マルクーゼの以下の提言を読む時、一つの大事な示唆がたち現
われてくるように私には思われます。「確証と証明の過程は純粹に理論的なも
のであるかもしれない。しかし、それは、決して真空のなかで行われるものでは
ないし、私的な個人の心のなかで終わるものでもない。形式と機能の仮設的
な体系は、もう一つの体系——この体系が、そのなかで、そのために発展する
ところの、あらかじめ確立された諸目的——に依存するようになる。理論的企
てにとって異質で無縁のようにみえたものが、その本質的構造（方法および概
念）の一部であることが判明する。純粹な客観性は、テロス、目的を準備す
るところの主観性にとっての対象として現れてくる。テクノロジカルな現実の
構成には、純粹に合理的な科学的秩序といったようなものは存在しない。テク
ノロジカルな合理性の形成過程は政治的過程である⁽³⁶⁾」。「とすれば、この宿命的
な結びつきを切断する可能性をもった進歩の方向転換は、科学の構造そのもの
——科学の構想——にも影響を与えるであろう。科学の仮説は、その合理的性
格を失わないままで、本質的に異なった経験的文脈（平和の回復された世界の
それ）において発展するだろう。その結果、科学は本質的に異なった自然の概
念に到達し、本質的に異なった事実を確証するであろう⁽³⁷⁾」。どなたかも、こう
言っていました。人類は、飛行機を進化させた結果、月に行けるようになった

のではない、月に行こうという飛躍が飛行機とは別な乗り物を開発したのだと。無論、その時、可能的実存としての私達がどこまで所与的必然性の重さを引き受けることが出来るのかということに、この投企のリアリティーがかかっているのだと言わなければなりません。⁽³⁸⁾

注

- (1) ヤスパーズ『歴史の起源と目標』（選集／第9巻）重田英世訳 理想社 183頁。
- (2) 参照 高山岩男『哲学的人間学』（著作集／第2巻）玉川大学出版部 142頁以下。
- (3) 参照 デッサウエル『技術の哲学』永田廣志訳 科学主義工業社。
- (4) 参照 ヘーゲル『精神の現象学（上）』（全集／第4巻）金子武蔵訳 岩波書店。
- (5) 参照 ハイデッガー『技術論』（選集／第18巻）小島武彦／アルムブルスター訳 理想社 26頁、73頁以下。
- (6) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』183頁。
- (7) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』186頁以下。
- (8) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』188頁。
- (9) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』193頁。
- (10) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』184頁。
- (11) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』218頁以下。
- (12) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』229頁以下。
- (13) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』230頁。
- (14) 参照 ヤスパーズ『デカルトと哲学』（選集／第6巻）重田英世訳 理想社 161頁以下。
- (15) 前出 デッサウエル『技術の哲学』52頁。
- (16) 前出 デッサウエル『技術の哲学』9頁以下。
- (17) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』187頁。
- (18) 前出 デッサウエル『技術の哲学』123頁以下。
- (19) 前出 デッサウエル『技術の哲学』68頁。
- (20) ヤスパーズ『現代の精神的状況』（選集／第28巻）飯島宗享訳 理想社 56頁。
- (21) ヤスパーズ『現代の政治意識——原爆と人間の将来（上）』（選集／第15巻）理想社 451頁以下。
- (22) 前出 ヤスパーズ『現代の政治意識——原爆と人間の将来（上）』468頁以下。
- (23) 参照 拙著『ヒューマンイズムの時代——近代的精神の成立と生成過程』未来社 61頁以下。

〔第29回大会公開講演〕

- (24) フリーデル『近代文化史（I）』宮下啓三訳 みすず書房 209頁。
- (25) ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』長谷川宏訳 紀伊国屋書店 47頁。
- (26) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』161頁。
- (27) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』157頁。
- (28) 参照 デービス／ヘルシュ『デカルトの夢』棕田直子 アスキー出版 277頁以下。
- (29) 前出 ヤスパーズ『歴史の起源と目標』164頁。
- (30) 前出 ハイデッガー『技術論』41頁以下。
- (31) 前出 ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』47頁以下。
- (32) 三木清『構想力の論理』（全集／第8巻）岩波書店 248頁。
- (33) 参照 クーン『科学革命の構造』中山茂訳 みすず書房。
- (34) 前出 ハイデッガー『技術論』61頁。
- (35) ヤスパーズ『哲学的自伝』（選集／第14巻）重田英世訳 理想社 130頁。
- (36) マルクーゼ『一次元的人間——先進産業社会におけるイデオロギーの研究』生松敬三・三沢謙一訳 河出書房新社 188頁。
- (37) 前出 マルクーゼ『一次元的人間——先進産業社会におけるイデオロギーの研究』186頁以下。
- (38) 参照 拙論「論理と体験と——ヤスパーズ包括者論をめぐって」『理想』（No. 671）所収 理想社 10頁。

※本稿は、2012年12月8日（土）、早稲田大学で開催された「日本ヤスパーズ協会（第29回大会）」で行なった公開講演の記録です。

（鎌倉女子大学教授）